

# 「ホテル山」 旧帝国ホテル石材採掘跡

宇都宮伝統文化連絡協議会 柏村 祐司

大谷寺の北西、立岩街道に架る姿川紅葉橋付近から北西の方向に、旧帝国ホテルの石材採掘跡地がある。地元民から「ホテル山」と呼ばれている所である。

旧帝国ホテルは、アメリカ人のフランク・ロイド・ライトの設計による。大谷石等を用いた斬新なデザインの建物は、建築家のみならず多くの人の関心を呼ぶとともに、大正十二年九月一日の関東大地震に倒壊・焼失を免れたことから一躍大谷石の名声を高めることにもなった。

ライトが旧帝国ホテルの設計



明治村に移築された旧帝国ホテル正面玄関

をまかされたのは、当時の帝国ホテル支配人の林愛作からの依頼による。林愛作は、かつて古美術商・山中商会のニューヨーク支店に勤務したことがあり、そこで浮世絵の収集でも知られたライトと知り合った。林愛作とライトは旧知の仲だったのである。

ライトの設計で特筆すべきは、スクラッチタイル(すだれ煉瓦)と大谷石を多用したことである。明治末期から大正初期、政府は国会議事堂の建設に向けて国内の石材調査を実施し、標本を収集していた。ライトは、林愛作らの計らいにより、秘かに臨時建設局の石材標本室を訪れ標本を検分していたという。そして理想の石として石川県小松市菩提町産の菩提石、通称蜂の巣石を選んだ。しかし産出量が少ない事などから菩提石を断念し、代わりに同じ質感の大谷石を採用したのである。

こうして旧帝国ホテルの建材に大谷石が選ばれたが、採掘

業者が問題となった。規格品の採掘を中心とした業者では、ライトの多様な注文に応じきれない。そこで大谷石採掘とは縁のない業者ということになった。白羽の矢があてられたのは、宇都宮市にあった土木請負業の大日本亀田組であった。

経営者は亀田易平で、彼は宇都宮市下小倉の出身で、初め土木請負業を営んでいたが、縁あつて伊藤博文の私設秘書となった。伊藤博文が暗殺された後、再び土木請負業を営んでいたのである。当時、帝国ホテル専務取締役で、同じく伊藤博文に仕えていた旧知の戸田次郎より依頼されて大谷石採掘を請け負ったという次第である。

亀田易平は、旧帝国ホテル建設のために専用の採掘場を設けた。場所は、宇都宮市田下町の東端である。そして採掘のためだけに「東谷石材商店」を設立し

たのである。旧帝国ホテルは、大正十二(一九三三)年九月一日に落成式を迎えた。東谷石材商店も、石山の購入も、その資金の出所はホテル側であり、用務完了とともに東谷石材商店は閉鎖したのである。

旧帝国ホテルの評価は、前述した通りである。しかし残念ながら昭和四十二(一九六七)年には、老朽化等の理由から玄関ロビーの一部を除いて取り壊された。僅か四十年の短い命であった。

一方、大谷石採掘地は、その後屏風風岩石材等に買い取られ、カトリック松が峰教会の石材にも利用されたといい、平成の世まで採掘された。現在見られる山の姿は、旧帝国ホテル建設時の採掘跡ではなく、後の機械化された時代の採掘跡である。兵どもの夢の跡、大正八年八月二十日 山神東谷 亀田易平記」と刻まれた岩だけが往時の姿を留めている。



採掘跡地に残る山の神碑